

水辺の生物



写真提供
校閲 草野保氏

トノサマガエル

(殿様蛙)

両生綱・カエル目・アカガエル科

風格ある姿、俊敏な動作などが「殿様」の名にふさわしい、日本のカエルの代表格・トノサマガエル。九州、種子島、四国、本州、北海道の一部に分布するが、関東から仙台にかけての太平洋側は空白域とされる。この空白域に住むのは、トノサマガエルによく似た別種のトウキョウダルマガエルで、かつては同一種と混同されていた。

トノサマガエルは日本に生息するカエルで唯一、色彩や模様が雌雄で異なる。オスは背中中央に黄緑色のはっきりした縦すじがあり、全体に緑っぽいのに比べ、メスは全体に灰白色で黒い不規則な斑紋があり、背中の縦すじも白。また、オスは繁殖期に金色を帯びる。カエルのなかでは中型で、成体でオスが5.5～7.5cm、メスは6～9cmとメスのほうが大きい。ジャンプ力があり、優に1mは飛ぶ。水田や池などにすみ、動くものなら何にでも飛びついて食べようと、昆虫、クモ、ヤスデ、アリ、バッタ類、さらには同種や異種のカエルの幼体など、生息地にいるありとあらゆる小動物を捕食する。

分布域が広いので、繁殖期は地域によって、またはその年の気象条件などによって、1～2ヶ月ずれる場合がある。たとえば温暖な九州や四国、本州西南部などでは4月半ばから6月初旬、寒冷地では5月中旬から7月ころまで。繁殖期のオスは日没後から翌朝にかけて、「カエルの合唱」として知られるにぎやかな集団ディスプレイ(求愛行動)を行う。これには縄張り宣言の意味もあり、縄張りに進入する他のオスを力づくで追い出そうと取っ組み合う姿を「カエル相撲」などと昔の人は面白がった。メスは1年に1度、1800～3000個の塊状の卵を産む。産卵後、野外では5～7日でふ化。おたまじゃくしは、ふ化後3週間程度で全長が4.5cm程度になると尾の付け根から後肢が出る。後肢が出揃うと、まず左前肢がえら穴から出て、しばらくすると右前肢が皮膚が溶けてできる穴から出てくるのが観察される。ふ化後約1ヶ月半で変態が急激に進行し、3～4日で尾が分解・吸収されて完全な肺呼吸となり、陸上生活へ移る。オスのほうが性成熟が早く、ふ化後1年余りで繁殖可能に。メスは満2歳で産卵を始める。

1960年代には水田やその周辺で普通に見られたトノサマガエルだが、1990年代から全国各地の平野部で急激に減少。府県単位のレッドデータブックに記載しているところが多い。農薬、水質汚濁、水田の減少と大規模な基盤整備による水田の乾田化、イネの耕作時期や方法の変化、農地周辺の草地の減少などの影響が大きいという。全国的に個体数が多かった本種の激減は見過ごせない事態とされる。

参考文献：「今、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち」解説・市川憲平ほか 山と溪谷社刊 2007年
「日本動物大百科」平凡社刊 1996年ほか